

晴りの青空

福井の女性キャリア相談記

松岡 幸代

8

土曜日の昼下がり。午前中降っていた小雨はいつの間にかやみ、暖かくてやわらかな日差しが降り注いでいた。と、その時、こちらに向かつて小鳥のさえずりのようにぎやかで楽しそうな声が近づいてきた。その声の主は相談者、TさんとNさんだった。

同じ職場で働く二十代の二人は、一つ違いの先輩と後輩。同じ趣味を持ち、プライベートでも一緒にいることが多い仲良しの二人。そんな二人の共通の悩みは「最近、仕事が楽しくない」ことで、顔を合わせればいつも会社のグチを言っているらしい。「仕事が合わないならいつそのこと転職したほうが…」と話がエスカレートし、どうしてよいのか分からなくなったところで今回、この相談の申し込みをしたといういきさつだった。

早速、二人の話を聞いてみることに。「この前の人事で上司が変わってからは無理なことばかり言うんだよね」「ねー」、「私たちの気持ちを無視しているよね」「ねー」と息はピッタリ、二人は顔を合わせながら話す。そ

の表情は、まるで鏡に映しているかのように似ていた。

ともかく、二人の思いをすべて吐き出してもらおう、とじつくり話を聞いた。三十分ほどたっただろうか。話の端々から、それぞれの思いが見えてきた。

「私は頑張ってる仕事をしているのに評価してもらえなくて、悔しいんです」と口を一文字に結ぶTさん。隣のNさんは、そんなTさんを見て目をパチクリさせていた。反対に「毎日忙しくてバタバタ。こんなんでこの先仕事を続けていけるのか不安で」とうつむきながら話すNさんに、Tさんは「あれれ？」という表情。共通の悩みを持っていた二

気の合う同僚

悩み違えど励まし合い

人だったが、本当の理由は違っていたっ？

そこで私は、Tさんが評価されていないと感じるのはどんなときか、また、Nさんはどんなことが不安に感じるのかを聞いた。

「結果も大事だけど、そこへたどり着くまでの頑張りを見てほしいんです。前の上司は「頑張っているね、ありがとう」と声をかけてくれて、それだけでよし、明日も頑張ろう」と思えたのに……と答えるTさん。そして、引き続きNさんが、「遅くまで残業して家に帰る毎日で、すてきな男性との出会いなんてないし、まして結婚なんて絶対ムリ。かといって、私しかできないような仕事を任されているわけでもないし……」。

二人は、大きくうなずきながら互いの答えを聞いていく。それぞれの心の声を聞いたことで、さらに分かり合えた二人。そんな感じだった。

最後に聞いてみた。「一年後、どうなっているだろう、れいですかね？」。すると、「二人は口をそろえて、「楽しく充実した毎日をごせたらいいですよ。仕事にやりがいがあるって、プライベートも、ねー。そうなるように、できることは精いっぱい頑張らないとね！」と、顔を見合わせる二人。思いのたけをすべて話すことで、それぞれの思いを確認し前向きに考えたからか、あのモヤモヤがスッキリ解消したような表情を見せた。

「いいですね。職場に気の合う仲間がいて」。その声をかけた。そうなのだ。頑張る女性は概して孤独なのだ。でも、こんなふうに励まし合える友達がいるってすばらしい。こういう仲間がいればこそ、つらいことも乗り越えていけるもの。

二人にとってお互いの存在は、何物にも変えがたい財産だと思ふ。きっと二人も同じ思いだろう。並んで帰る二人の後ろ姿に私はエールを送った。



イラスト・多田くにお

(福井新聞社提供)